

## ポズナップ氏と水の帝国

『我が共通の友』を『エドウィン・ドルードの謎』  
から読む

Mr Podsnap and the Watery Empire:  
A View of *Our Mutual Friend* from  
*The Mystery of Edwin Drood*

藤井 晶宏  
Akihiro FUJII

ディケンズは1865年に『我が共通の友』(以下、『共通の友』)を完成させてから、ほぼ五年後に最後の小説『エドウィン・ドルードの謎』(以下、『エドウィン・ドルード』)の執筆を開始した。推理小説として知られる『エドウィン・ドルード』は結局作者の死によって完結はしなかったため、書かれなかった結末については様々な推測がなされている。

もっとも、これから筆者が試みようとしているのは、そうしたことなく、完成された『共通の友』を未完の『エドウィン・ドルード』から見てみるということ。すると、『共通の友』だけ見ていたときには気づかなかったものに気づく。『エドウィン・ドルード』には大きな意味を持つものとして描かれたものが、『共通の友』ではまだそうではない。それは、未完の『エドウィン・ドルード』の書かれなかった結末とは全く違った意味で、『共通の友』の「まだ書かれていなかった部分」だと言うこともできる。

鍵になるのは、それぞれの作品に登場する愛国者である。彼らはいずれも、商売を通じて諸外国との間に接触がありながら、閉鎖的である。外国と接触することは、彼らの場合、外に対して開かれた態度をとることを意味してはいない。むしろ、「外国との接触」ということから我々が通常予想するような、異質なものとの接触こそを、彼らは厭うのだ。その共通項を認めた上で、二人には大きな違いがある。その違いをもたらすもの、それが問題なのだ。

\*

ディケンズ最後の作品にして、未完の小説『エドウィン・ドルード』は、クロイスタラムという、大聖堂を中心にしたある古い単調で沈滞した町を舞台にしている！ディケンズが繰り返し描いてきた、変化する多様なロンドンとは対照的に、その住人は「すべての変化は過去にあり、もはや今後起きることはない」と思っている？ロチェスターをモデルにしたともいわれるこの町は、しかし決して辺鄙な山奥に位置しているわけではない。ロンドンにもその日のうちに着ける近さにある。肝心なのは、その近さにもかかわらず、変化を避け現状を維持しようとする傾向が町で共有されていることだ。つまり、ある同質さが存在する町であることだ。

しかし同様に重要なのは、町の中央に本通りが貫いていて、この町に入るうとするものも出ていくものも、それを通らなければならないということ。この地形的な特徴は、この町が「奥」や「行き止まり」でなく、むしろありとあらゆる所に通じるルートの「途中」にすぎないことを示している。言いかえれば、この町がその住人の思惑とは正反対に、様々な外界の影響に対して開かれていること、変化がもたらされやすいことが暗示されている。

第六章で、ある鉄道の支線の駅が、クロイスタラムから少し離れたところに建設されたため、この本通りが外界への主要ルートとしての地位を失ったことを、我々は知らされる。確かに、馬車を交通手段と考えた場合はそうであろう。しかし、本通りはその意味を失ってはいない。ここの住人が町を出て別の場所に行くときには、その通りを通して馬車乗り場まで行き、馬車で駅まで行き、そこで汽車に乗ることになるからだ。

つまり鉄道の発達は、決して通りの持っている性質を根本から変えたわけではない。依然として、通りはあらゆる人の通行を許しているという意味で、開かれている。むしろ、本通りと鉄道は統合されて一つのルートになり、その性質は強化されている。それによって、より多くの人々がより容易に速く移動することが可能になった。現に、セイロンからヘレナとネヴィル・ランドレス姉弟のような色の黒い、虎の血を持つ(8, 78)ともいわれる異質な外国人が、この古い町にやって来るという事態を可能にしている。彼らは、鉄道、馬車を使って、この町にやってきたのだが、それは、鉄道や通りが作り上げるネットワークによって、クロイスタラムと、遠く離れた彼らの出身地セイロンが、いわば直接に結びつけられたことを示している。そうして、セイロンという外の世界からやって来た彼らこそが、この同質の空間クロイスタラムを大きく揺さぶることになる。

一方クロイスタラムを代表する人物として、この本通りに面して店を構えてい

る競売人のサブシー氏について触れておこう。このサブシー氏こそが、上で触れた排他的な愛国者の一人なのだが、クロイスタラムという町を考える際に、彼は最も重要な人物とっていい。彼は二重の意味でクロイスタラムの「中心」に位置しているからだ。まず、地形的に本通りに面している彼の店が、クロイスタラムの中央に位置しているという点。もう一つは、大聖堂を中心に栄えたクロイスタラムで、彼は「主席司祭さまと間違われてお辞儀されたり」、「クロイスタラムの誉」(4, 31)と呼ばれる人物として登場し、更に小説の後半では町長にまでなるという点。(ただし、語り手によって最初から「クロイスタラムの最純正種の口バ」と紹介されていて、その意味を「純然たる愚鈍と思いがりの典型」(4, 31)と定義され、決して肯定的に描かれた人物ではない。)

しかし、ルートの「途中」にあるクロイスタラムにとって「中心」とは本質的に矛盾を含んだ存在だといっていだらう。それは、一方で世界中から多くの商品が流れ込んでくることを喜びながら、もう一方で鉄道を激しく嫌悪するサブシー氏の姿勢に端的に表われている。商品の流入には、彼の嫌悪する鉄道が大きく貢献している筈なのだが、彼はそこに何ら矛盾を感じているようには見えない。

‘If I have not gone to foreign countries [. . .], foreign countries have come to me. They have come to me in the way of business, and I have improved upon my opportunities. Put it that I take an inventory, or make a catalogue. I see a French clock. I never saw him before, in my life, but I instantly lay my finger on him and say “Paris!” I see some cups and saucers of Chinese make, equally strangers to me personally: I put my finger on them, then and there, and I say “Pekin, Nankin, and Canton.” It is the same with Japan, with Egypt [. . .]

(4, 33)

In those days there was no railway to Cloisterham, and Mr. Sapsea said there never would be. Mr. Sapsea said more; he said there never should be.

(6, 54)

中心に君臨し、クロイスタラムという同質な空間を現在のまま維持していこうとする彼にとって、あらゆる空間を横断して延びる鉄道は、何よりも警戒すべきものだった。大聖堂という宗教的建造物を中心に成り立つクロイスタラムという、他と峻別されるべき「聖なる」空間とは対照的に、鉄道が生み出した空間は、いかなる「中心」からも自由で、「聖」とは正反対の均質な空間にほかならないからだ。

鉄道の建設がうまくいくと、教会と国家、それに‘Constitution’を滅ぼすといわれているが(6, 54-55)、ここでサブシー氏が滅ぼされることを心配しているのは、言うまでもなく、英国であると同時にクロイスタラムそのものである。ここに、英国とクロイスタラムが重なり合い、また、鉄道を嫌悪する「クロイスタラムの

誉」サブシー氏が、愛国者である意味もあるのだ。

彼の愛国精神は極めて自己中心的なものだった。彼はあるとき、大聖堂の聖歌隊長のジャスパーに、「生粋のジョージ三世陛下治世の国産品」の歌を歌ってもらったことに満足している。しかもその歌とは、サブシー氏によると、英国以外の全ての「陸地を完全に粉碎し、四方の海を征服(sweeping the seas)」せよ、英国以外の国民を多く生み出したのは「明らかに神様の間違いだった」という代物(12, 128)。鉄道拒否とこうした愛国精神が彼に、鉄道に乗ってクロイスタラムに現われた色の黒いランドレス姉弟に対して、批判的な態度をとらせたのだ。

この姉弟の、特に弟のネヴィルの方は、この古い沈滞した町の住人なら決して起こさなかったような騒動を、(直接ではないにしても)引き起こした。その騒動とは、エドウィンの失踪、町の住人の考えに従えば、ネヴィルによるエドウィン殺害、である。作者の死で未完に終わったため、エドウィンの生死は未だにはっきりしない。従ってネヴィルに罪があるかどうかもわからない。ただネヴィルはエドウィンと仲が悪く、しかもエドウィン失踪前に最後に一緒だった、という情況証拠によって糾弾されたに過ぎない。しかし今重要なのは、ネヴィルが本当にエドウィンを殺したかどうかということではなく、ネヴィルにかけられた容疑と、彼がセイロンから来た色の黒い外国人だということが切り離せないということだ。

Mr. Sapsea expressed his opinion that the case had a dark look; in short (and here his eyes rested full on Neville's countenance), an un-English complexion.

(15, 174)

この事件は、ネヴィルの顔色を非英国的と呼ぶサブシー氏に、鉄道の発達によって脅かされる「国家」=英国への連想を呼び起こしたようだ。結果的に、ネヴィルは殺人の容疑者として、この町から追い出されることになる。「非英国的」なものは何であれ奈落の底に落ちるべきだ(14, 164)と考えるサブシー氏にとって、このネヴィル追放は、愛国的な行為なのだ。もっとも、通りが町の中央を貫き、常に外に対して開かれている以上、この処置が一時的にしか有効でないことは言うまでもない。

\*

『エドウィン・ドルード』の一つ前の作品『共通の友』には、ポズナップ氏というサブシー氏の先駆者がいる。海上保険業者である彼は、サブシー氏と同様か、或いはそれ以上に仕事を通じて外国と取引がありながら、自己満足的な愛国者であり、「非英国的」なものを排除しようとするという面を持っている。

[. . .] although his business was sustained upon commerce with other countries, he[Mr. Podsnap] considered other countries, with that important reservation, a mistake, and of their manners and customs would conclusively observe, 'Not English!'"<sup>3</sup>

まるでサブシー氏が言ったかのようなこのセリフからもわかるように、二人の姿勢は極めて酷似している。しかもポズナップ氏にとっても、英国のみが神によって祝福された国なのだ。（'We Englishmen are Very Proud of our Constitution, Sir. It Was Bestowed Upon Us By Providence. No Other Country is so Favoured as This Country.' [I, 11, 133]）自己満足で神で裏打ちする点もサブシー氏と共通している。

しかし、重要な相違点は、ポズナップ氏にはサブシー氏を脅かした「鉄道」が存在しないことだ。上で見たように、サブシー氏が嫌悪する「鉄道」とは、外から異質なものを持ち込み、クロイスタラムという一見安定したシステムを動揺させる機能を持つものだった。

確かに『共通の友』の中に、鉄道が一切描かれていないわけではない。しかし、それらは決して外国や異質なものにつながっていない。ポズナップ氏が鉄道を利用するのは、社交界の仲間であるヴェニアリング氏の選挙運動に同行するため、選挙区のポケット・ブリーチへ行ったときだった。「興まった地」(II, 3, 251)にあるというその選挙区に行ったところで、そこに何か彼らを脅かしかねない異質なものがあるわけではない。むしろ、その地には、ロンドンのヴェニアリングやポズナップ的権力が拡大されるべき空間があるだけで、鉄道はその目的に利用されるだけだ。その彼らは、まもなく満足して本来の場所ロンドンに戻ることになる。

ちなみに、その他の人物が鉄道を利用するケースに目を向けても、『エドウィン・ドルード』に見られたような機能を、期待することはできない。ポズナップ氏以外で鉄道を利用するジョン・ロクスミスやベラ・ウィルファーの行き先の一つも、外国とは反対方向のテムズ河を溯った地域だった。しかし、反対なのは方向だけではない。テムズ河上流にあるその場所はあくまでロンドンの世界の延長であり、異質さが存在しないという意味でも反対だった。まずそこで彼らを迎えてくれたのはリジー・ヘクサムという、もともとロンドンの河さらいギャファー・ヘクサムの娘であり、彼女自身ももとはロンドンに住んでいた。ある事情から、ここに逃げてきて隠れるように住んでいたにすぎない。そこで、彼女をかくまってくれていたユダヤ人たちにしても、彼女がロンドンにいるところからの知り合いのユダヤ人ライア氏とのつながりを持つ人たちだった。またジョンがベラと結婚後、ロンドンの仕事場と妻の待つグリニッジの家を往復するときにも鉄道は利用されるが、ベラが書物以外に相談相手を持たない、という彼らの家庭は、そもそも彼らを脅かす他者そのものを拒絶した閉鎖的空間だった。

ここで鉄道を使用するポズナップ氏とロークスミスやペラを並べてみると、意外にも両者に共通点があることに気付く。彼らは、ランドレス姉弟のように故国を棄て、全く異なる場所に住むために鉄道を使うことはなく、最終的にロンドンに戻るときにしか使わない。ロークスミスたちがグリニッジにいるときでさえ、一時的にロンドンを離れているだけで、やがてはロンドンにある故ジョン・ハーモンの家に無事おさまることになっていた。つまり、彼らはあくまでロンドンを中心に置いて、汽車に乗って周辺の地に赴こうとも、やがて中心に戻ってくる。ロークスミス夫妻の自己満足的に後退して行く先が、ポズナップ氏のように国家ではなく、家庭の中だという違いはあるにせよ、このパターンが暗示するのは、いかに鉄道を利用しようと、彼らは一つの閉じた空間の中を移動するだけであり、ここに異質な要素が入り込む余地はないということだ。

『エドウィン・ドルード』と異なり、世界を一つの閉じた空間として意識させている要素と考えられるのが、作品中に行き渡っている海や水の存在である。『共通の友』に、河や水が極めて象徴的に使われていることは、しばしば指摘されていることだが、ここで水に注目する必要があるのは、この作品では、鉄道のかわりにこの水が、英国に外国を接触させる機能も持つからだ。ポズナップ氏が海上保険業という諸外国と接触のある事業で儲けた(I, 11, 128)という事実もそのことを指している。しかし、海と密接な関係のあるポズナップ氏が考える外国とは、最後まで次のようなものだった。

‘We know what Russia means, sir,’ says Podsnap; ‘we know what France wants; we see what America is up to; but we know what England is. That’s enough for us.’

(IV, The Last, 816)

彼にとって諸外国は、具体性を欠いた抽象的な存在であり（例えば、ランドレスという存在に、抜き差しならない関係を迫られることがない）、従って全て理解可能で、何一つ恐れるに値する異質さを持っていない。また、世界を一つの傘の下に入れたような大英帝国の存在が、世界を拡大された同質な空間として把握することをより容易にしたはずだ。帝国が七つの海を支配したといわれるが、世界中に遍在する海を支配した英国は、全ての国をその内に抱え込み、理解困難であるはずの他者ですら、全て同質さの海の中に吸収してしまったかのようだ。ポズナップ氏はこうした英国の代表、『エドウィン・ドルード』でサブシー氏を喜ばせた歌詞を借用すれば、「海を支配(sweep the seas)」した人物なのだ<sup>4</sup>。

水を媒介にしたこうした外国との接触が『エドウィン・ドルード』の場合と著しく異なっていることは、作品冒頭に置かれた「どこからか来る男(a man from somewhere)」のエピソードにも、既にあらわれていた。第一巻第一章で、川さらいギャファー・ヘクサムによって、テムズ河に浮ぶ水死体が引き上げられる。こ

の水死体で発見されたとするジョン・ハーモン（ロークスミス）は、父親が死んで外国から帰国の途上にあつたと、ボズナップ氏もいる社交界のパーティの席上で皆に知らされる。「どこからか来る男」の話として、客たちの幾ばくかの関心を引いたこの話は、まもなく「ハーモン殺人事件」と名を変え、作品に遍在する水と共に社会のいたるところを廻る。しかし、やがて静かに消えて行くことになる(I, 3, 31)。

セイロンから鉄道と馬車を乗り継いできたランドレス姉弟が、クロイスタラムを混乱させたのと対照的に、船でやってきた「どこからか来る男」はもともと英国人で、しかもテムズ河で「溺死」した。伝わったのは話のみで、その話がいかに社会を隅々まで廻ろうとも、英国を脅かす要素などないことは明かである。

また、帝国の存在によって外国の諸地域がその異質さを意識されなくなったことを示すように、ボズナップ氏と同種の人が住むと思われる社交界では、帝国内の他の地域が、奇妙なほど無関心の中に漂うことになる。第一巻第二章で、「どこからか来た男」の話をするモティマーは、その「どこ」をケープワインが産出される場所と言い、南アフリカを暗示するが、それ以上は忘れたとして明らかにする必要を感じていない。その彼と、彼に「どこからか来る男」の話をねだるレディ・ティッピングズとの会話に出てくる帝国内の地名も、独自の個性を持つ存在ではありえず、他のものと交換可能な記号に過ぎない。

‘Now, Mortimer,’ says Lady Tippins [. . .], ‘I insist upon your telling all that is to be told about the man from Jamaica.’

‘Give you my honour I never heard of any man from Jamaica [. . .],’ replies Mortimer.

‘Tobago, then.’

‘Nor yet from Tobago.’

(I, 2, 11)

こうした帝国を支える水に囲まれているのはボズナップ氏たちだけではない。例えば、グリニッジの川縁のレストランで父親とこっそり食事をするベラムも、海に向かって川を下る船を見ながら、自由な想像を楽しむことができる。二人で世界のいたるところを航海したり、父親が船で中国から阿片を持ちかえってくることや、自らはインドの王子と結婚することなど(II, 8, 318-319)。無論、他愛のない想像ではあるのだが、彼女の頭の中でも、水の届く限り世界はどこでも障害なく到達することができる<sup>5</sup>。そこでは世界が、彼女にとって自由に利用される空間として広がっているにすぎず、その意味で彼女は、大英帝国の中心で同質の世界を享受しているボズナップ氏と重なる。

帝国の問題がボズナップ氏たち一部の upper class に限られないことをよく示しているのが、テムズ河を溯って、自らの場所を移動させる人たちの存在だ。彼らの多くは本来ボズナップ氏たちとは無縁な階層に属しているが、水が届く限り、

世界が障害なく自由に往来できることを国内においても示すように、彼らは河に沿ってロンドンから上流域に移動することになる。初めは河口近くでヘクサムと川さらいをしていたライダーフッドは、小説後半は川を溯った所で水門の番をしているし、ペティ・ヒグデンは救貧院を恐れて、氾濫すると冠水する川沿いの道を歩きながら溯っている(III, 8, 510)。先述のリジー・ヘクサムは言うまでもなく、彼女を追いかけるブラッドリー・ヘッドストーンやユージン・レイバーンも(しかも彼の場合は舟で)川を溯っている。彼らは水から離れることなく、自分たちの行動範囲を拡大していくのだ<sup>6</sup>。それはまさに、海(水)を通じて国外で勢力を広げていた英国のパロディーである。しかも、テムズ河上流の地域に住む人たちの存在感は希薄であり、彼らはどこに行っても互いに会うだけであり、その意味でロンドンとかわりはない。拡大されたロンドンとも言うべき空間にいる彼らは、その外に出ることはない。

それは鉄道を使おうと同じことで、誰も水の向うに越えていくことはできない。小説終盤に現われる、ペラとモティマーを乗せた汽車が川に寄り添いながら上流へと走る場面も、いくら汽車が「水路のうねりを傲然として嘲笑いつつ、ただひとすじに目的地へ突き進」もうと、水から離れることはない。「汽車の旅の後には、重々しく、ひそやかに流れる夜の川に沿っての馬車の旅が続」くのみだ(IV, 11, 751)。この事實は、『エドウィン・ドルード』に見られたような機能が、鉄道に期待できないことを改めて裏書している。

世界を閉じた空間にした水を支配し、その向うに決して越えて行くことがない英国の姿は、まさに大海原を勇壮に進む船だろう。それを知ってか知らずかヴェニアリング氏は、選挙区ポケット・ブリーチでの演説で、この選挙区がその一部をなす国家を船に例えてみせる。「国家という船の船材が腐朽し、その船の舵をとる者の技量が未熟である時、かの偉大なる海上保険業者諸氏は(略)、その船の保険を引き受けるではありませんでしょうか」(II, 3, 252)と。国家を船に譬えることそのものは陳腐であるかもしれないが、今は問題ではない。ヴェニアリング氏にしても、ポズナップ氏が応援してくれているから、彼の機嫌をとるためにこの比喩を使用したに過ぎない。ただこの陳腐な比喩は、それまで我々が見てきたポズナップ氏の英国礼讃が、世界の大海原を航行する船舶としての英国という国家は決して沈まないという、海上保険業者としての評価でもあったことに気づかせてくれる。英国が、絶対没することのない国家として、永遠にこの同質な水の上を航行することの保証である。

\*

しかし、『共通の友』は、世界を同質化する英国礼讃に終始しているわけでは



ない。英国の中に不快な事実が存在することも告げている。英国は祝福されていて、その中に不調和な物が含まれていないという振りをいくらポズナップ氏がしようとも、それはあくまで振りにすぎない。彼にそうした振りが可能だったのは、彼が独特の対処法を持っていたためだ。厄介な問題は、腕を一振りすれば、それで済んだのだ。

‘I don’t want to know about it; I don’t choose to discuss it; I don’t admit it!’ Mr. Podsnap had even acquired a peculiar flourish of his right arm in often clearing the world of its most difficult problems, by sweeping them behind him [. . .] with those words and a flushed face.

(I, 11, 128)

今我々にとって関心があるのは、こうした彼の自己中心的な態度を改めて確認することではなく、このような彼と他の人物たちの中で起きた、通りをめぐるやりとりである。「通り」が、『エドウィン・ドルード』において、鉄道と一体になって同質なクロイスタラムを脅かす機能を持ったことに先ほど触れたが、『共通の友』の「通り」に、わずかに同じ機能を感じとることができる。

ポズナップ氏は、娘ジョージアナの18歳の誕生日にパーティを開いたとき、その招待客との会話の中で、通りにまつわる現実、つまり「祝福された英国」と調和しない部分を二度つきつけられている。

一度目はフランス人との会話。鉄道が発達すると‘Constitution’が脅かされると考えたサブシー氏とは対照的に、すぐれた‘Constitution’の具体的な痕跡がロンドンの大通りに多く現われていると、自己満足的に誇るポズナップ氏。

‘And Do You Find, Sir,’ pursued Mr. Podsnap, with dignity, ‘Many Evidences that Strike You, of our British Constitution in the Streets Of The World’s Metropolis, London, Londres, London?’[. . .]

‘I Was Inquiring,’ said Mr. Podsnap [. . .], ‘Whether You Have Observed in our Streets as We should say, Upon our Pavvy as You would say, any Tokens—’

The foreign gentleman with patient courtesy entreated pardon; ‘But what was tokenz?’

‘Marks,’ said Mr. Podsnap; ‘Signs, you know, Appearances—Traces.’

‘Ah! Of a Orse?’ inquired the foreign gentleman.

(I, 11, 132)

外国人を見下ろしているポズナップ氏にすれば、フランス人が言うことなど、聞くに値しないことは明白である。だが、英語を理解できないこのフランス人の勘違いが、ポズナップ氏に対する皮肉になっていることは明かである。

二度目は、その外国人の少し後に、ある紳士(a stray personage)が迷い出てきて、「最近路上で半ダースほどの人間が餓死した」(I, 11, 140)という報告書が出ていると言い出したこと。ポズナップ氏はそれに対して、英国ほど「立派な貧乏人対策

を取っている国」はないから、そんな話は信じないといい、また、そうしたことが起きるとすれば「罪は餓死するほうの側にある」と言う。最後は、右腕を大きく振ると、その問題を「地上から抹殺」してしまう。

通りは、彼が思うほど英国が祝福された国ではないことを示している。こうした通りだけが、海のように面状に広がるポズナップ的世界に、切り裂くように亀裂を生じさせることが可能なはずだった。奇妙な言い方になるが、ポズナップの世界の中心ともいえるロンドンという空間に、縦横に走っているこうした「通り」こそ、異質な世界だったのだ。(中心に通りが貫いている『エドウィン・ドルード』のクロイスタラムは、こうしたロンドンを簡略化した姿であることに気付かされる。)ただ、通りで人が餓死していることに言及した男性がポズナップ氏の腕の一振りですぐ追いつかれたように、通りはポズナップの世界をつき崩す力をまだ持っていない。まだまだポズナップ氏の世界は、サブシー氏の世界ほど脅かされてはいないのだ。セイロンからランドレスも来なければ、クロイスタラムの中心である大聖堂を内側から解体させるジャスパーもいない。

多くの人が餓死する通りを知っている人物が、社交界の外にはいる。身体が不自由で松葉杖をついた人形の衣装作りジェニー・レンが、毎日歩き回っていた通りは、まさにそうした厳しい現実の通りだった。彼女は通りで何が起きているかよく知っている。「ごみごみした暗い通りで生きている人たちが、泣きわめいたり、あくせく働いたり、お互い呼びかけて」いて「その人たちがとつてもかわいそうな気がする」(II, 5, 281)と言えるのも、そのためだ。しかし、こうした声がポズナップ氏の耳に届くことはない。

彼女が日々歩いていた通りには、ポズナップ氏の知らない次のような人々の姿が見られたはずだ。ポズナップ氏の一振りですぐ追いつかれた先程の男性と同じように、通りは'stray'の場であることがよくわかる。

melancholy waifs and strays of housekeepers and porters sweep melancholy waifs and strays of papers and pins into the kennels, and other more melancholy waifs and strays explore them, searching and stooping and poking for anything to sell.

(II, 15, 393)

ジャスパーが歌った歌詞を再び借用すると、海を'sweep'するのがポズナップ氏だとすると、通りを'sweep'するのは、ポズナップ氏とは極めて対照的な『荒涼館』のジョーにも似たこうした人物たちに過ぎない、ということになるのか。

\*

『共通の友』から『エドウィン・ドルード』へと至る過程は、世界中に遍在する海を支配することで、全てを同質さの中に回収しようとした英国が、鉄道と通

りという別種の均質な空間が作り上げたネットワークによって亀裂を入れられていく過程だと考えることができる。改めて指摘するまでもないのだが、セイロンからランドレス姉弟を英国につれて来たルートは、もともとは英国が自らの勢力を拡大したルートでもあったはずだ。その段階では、鉄道も世界の同質化に貢献していたのだ。それは丁度『共通の友』の鉄道が、中央から周辺の地へ、時には河に寄り添いながら、人々を運んだようなものだ。『エドウィン・ドルード』において、英国のはるか遠くに位置するセイロンから来て、クロイスタラムを混乱させた彼らは、英国が世界に勢力を拡大したまさにその皮肉な結果だった<sup>7</sup>。こうして『共通の友』の後に『エドウィン・ドルード』が来るように、ポズナップ氏の英国の一步先には、異質な世界に脅かされるクロイスタラムが姿を現すことになるのだ<sup>8</sup>。

## 注

本稿は新生言語文化研究会関西支部例会（2001年9月14日、於同志社大学）において、口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

- 1 『エドウィン・ドルードの謎』に関する部分は、拙論「通りから見た『エドウィン・ドルードの謎』」（『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第23号、2000）と一部重複する部分があることをお断りしておく。詳しくはそちらを参照していただきたい。
- 2 Charles Dickens, *The Mystery of Edwin Drood*, Oxford Illustrated edition (Oxford UP, 1987) ch. 3, 18. 以下、引用はこの版を用い、章数、頁数のみ示す。日本語訳の箇所は小池滋氏の訳（創元推理文庫）を使用した。
- 3 Charles Dickens, *Our Mutual Friend*, Oxford Illustrated edition (Oxford UP, 1987), Bk. I, ch.11, 128. 以下、引用はこの版を用い、巻数、章数、頁数を示す。日本語訳の箇所は間二郎氏の訳（ちくま文庫）を使用した。
- 4 外国との交易によって利益をあげる人物として、『ドンビー父子』のドンビー氏がいたことを我々は知っている。奇しくも、『ドンビー父子』においても、鉄道と海が対照的なものとして扱われている。海＝女性性と結びつけられる娘フローレンスに対して、鉄道＝男性性と結びつけられるドンビー氏という図式でとらえられることもあるが、（例えば、Nina Auerbach, 'Dickens and Dombey: A Daughter After All,' *Dickens Studies Annual*, 5 (1976), 95-114), しかしこの作品においても、海とはまず 'a means of global traffic and imperial wealth' であった (Suvendrini Perera, *Reaches of Empire* (New York: Columbia Univ. Press, 1991), 65)。ポズナップ氏にとっての海も、まずこうした側面から考える必要があるだろう。
- 5 彼女の空想の中で、父親が利益を得る手段として中国から持ちかえることになる阿片が、『エドウィン・ドルード』では、クロイスタラムの聖歌隊長ジャスパーの精神を蝕む

ことになる。当然のことながら、こうしたことは彼女のあずかり知らぬ、まだ書かれていない物語に属する部分である。

- 6 ここにロークスミスを加えることが可能かもしれない。彼の外国での生活は、殆ど知らされていないのだが、彼は若い時に船で外国へ出て、船乗りの経験を持ち、作品が始まった時点で、船で英国への帰国の途上にあつた、という点には注意を惹かれる。様々な国を廻つたという彼がまさに、水から離れることなく世界を移動していた人物である可能性はある。そうであれば彼は、水（海）によって閉じられた空間の中を移動していたに過ぎないということができる。
- 7 文明の進んだ英国人が、アフリカのような原始的な世界で、文明人としての衣を失うように変わって行くことはコンラッドの作品『闇の奥』におけるクルツの例でよく知られている。だが、ヴィクトリア朝後期やエドワード朝の多くの小説において、その逆の姿が描かれていることに、プラントリンガーは触れている。つまり、原始的な世界が逆に文明国である英国に侵入してきて、原始化、野蛮化しようとするという形を指すものである。そうした一群の小説をプラントリンガーは‘imperial gothic’と呼ぶのだが、‘imperial’という名称は、こうした現象が、世界に勢力を拡大していた大英帝国の皮肉な副産物だったことを示している。Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness* (Ithaca and London: Cornell UP, 1988), 227-228.
- 8 ただしこれは、ディケンズが最後の作品まで、自己満足的で外界に脅かされない英国ばかり描いていたことを意味しない。『共通の友』の英国は、『リトル・ドリット』中において、自らコスモポリタンを名乗るブロンドワに脅かされるクレナム家以上に外界を持っていない。全く異なる文脈の中ではあるが、ブロンドワも、通りに属する人物であることにかつて触れたことがある。拙論『リトル・ドリット』 「終わり」と監獄をめぐる」(『密教文化』第197号, 1997)。